

金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇
第3号 2011年 25～46

現代アイスランド語の相互代名詞

入 江 浩 司

1. はじめに*

現代アイスランド語¹において、相互関係を表現するのに最も生産的な手段は、相互代名詞を使用することである。アイスランド語の相互代名詞は、英語の *each other* や *one another* と同様に、二つの代名詞要素の組み合わせから成る。

- (1) *Þeir börðu hvor annan.*
they.NOM beat.PST.3PL each.NOM other.ACC

「彼らはお互いに殴り合った。」

- (2) *Þeir ræddu hvor við annan.*
they.NOM talked.PST.3PL each.NOM with other.ACC

「彼らはお互いに話し合った。」

本稿では相互代名詞が(1)のように動詞の目的語の位置に現れる場合と、(2)のように前置詞と結びつく場合を中心に取り上げ、その使われ方の実態を、概説的ではあるが、なるべく全体像がつかめるように記述することを目的とする。

アイスランド語の相互代名詞は、第一要素と第二要素の形態的な現れ方が非常に複雑である。各要素の形態の選択に関わる点として、次のような事柄が挙げられる。

- a. 第一要素および第二要素が主語の性（男性・女性・中性）と一致する。
- b. 数に関して、主語が二者か三者以上かによって、異なる形態が選択される。
- c. 数に関して、主語が個別のものから成るか、グループから成るかによって、異なる形態が選択される。
- d. 第一要素と第二要素が異なる格形で現れる場合と、同一の格形で現れる場合がある。

なお、相互代名詞が照応する先行詞は、原則として、同じ節内の述語の主語となる名詞句である。また、相互代名詞は節の境界を越えた位置にある要素と照応することができない。Thráinsson (1979: 41) は次のような例を挙げてこれを示している。この例文では、接続詞 *að* ‘that’ によって導かれる従属節中の相互代名詞 *hvor annan* は、上位の節の主語 *mennirnir* と照応することができない。

- (3) *Mennir-nir sögðu að ég hefði rakað hvor
 men-the.NOM said.PST.3PL that I.NOM had.SBJV.1SG shaved.PPT each.NOM
 annan.
 other.ACC
 「(男たちは私がお互いの髭を剃ったと言った。)」

本稿の構成は次の通りである。まず第 2 節で、相互代名詞の形態の選択に関わる要因を細かく分けて例示する。その後第 3 節で、新聞記事のデータから、動詞や前置詞の目的語として相互代名詞が使用されている具体例を場合分けして示し、また、これ以外の関連した用法についても言及する。第 4 節はまとめである。

2. 相互代名詞の形態

上述のように、相互代名詞の形態的な現れ方はかなり複雑であり、この節ではその形態の選択に関与する要因を分けて検討する。先行研究としては、Thráinsson (1979: 326, fn 24), Everaert (1990: 282-285) に相互代名詞の形態に関して簡潔な記述がある²。

以下、第一要素と第二要素それぞれ単独の形態 (2.1)、第一要素と第二要素の格形の現れ方に関する二つのタイプ (2.2)、主語との一致 (2.3)、について順に述べる。

2.1 各要素単独の形態

最初に述べたように、アイスランド語の相互代名詞は二つの要素から成る。第一要素は hvor 「(二者の) それぞれ」または hver 「(三者以上の) それぞれ」という不定代名詞、第二要素は annar 「別の、もう一方の」という不定代名詞である。第一要素も第二要素も、それぞれ単独で不定代名詞としての用法をもつ。また、第一要素は単独で、hvor 「(二者のうちの) どちら」、hver 「(三者以上のうちの) 誰、どれ」という疑問詞としての用法ももつ。それぞれの代名詞は性・数・格による変化を行なう。まず、それぞれの語の単独の変化表を挙げておく (表 1～表 3)。

表 1 第一要素 hvor の変化

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主格	hvor	hvor	hvort	hvorir	hvorar	hvor
対格	hvorn	hvora	hvort	hvora	hvorar	hvor
与格	hvorum	hvorri	hvoru	hvorum	hvorum	hvorum
属格	hvors	hvorrar	hvors	hvorra	hvorra	hvorra

表 2 第一要素 hver の変化

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主格	hver	hver	hvert*	hverjir	hverjar	hver
対格	hvern	hverja	hvert*	hverja	hverjar	hver
与格	hverjum	hverri	hverju	hverjum	hverjum	hverjum
属格	hvers	hverrar	hvers	hverra	hverra	hverra

(*複数概念をもつ中性単数名詞が主語の場合、中性単数主格・対格形は hvað ‘what’ が規範とされる)

表 3 第二要素 annar の変化

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主格	annar	önnur	annað	aðrir	aðrar	önnur
対格	annan	aðra	annað	aðra	aðrar	önnur
与格	öðrum	annarri	öðru	öðrum	öðrum	öðrum
属格	annars	annarrar	annars	annarra	annarra	annarra

2.2 二つのタイプ

相互代名詞の第一要素と第二要素は、それぞれ異なる格形になる場合と、同一の格形になる場合がある。異なる格形をとる場合、第一要素は主語と同格となり、第二要素は動詞や前置詞の目的語として要求される格形をとる。第一要素と第二要素が同一の格形になる場合（というよりむしろ、二つの要素の結びつきが強いと考えられる場合）は、原則としてその両方が、動詞や前置詞の目的語として要求される格形をとって現れる。

本稿では、第一要素が主格で現れ、第二要素が動詞あるいは前置詞の目的語として要求される格形をとる場合を「分離型」と呼び (Everaert 1990 のいう “split Case reciprocal”)、第一要素と第二要素が連続して並置され、動詞あるいは前置詞の目的語の位置で要求される同一の格形をとる場合を「一体型」と呼ぶ (Everaert 1990 のいう “like Case reciprocal”)。前置詞と結びつく際、分離型では第一要素と第二要素の間に前置詞が挿入され、一体型では第一要素の前に前置詞が現れる。次の例文は、前置詞を介さないで目的語をとる動詞の目的語の位置に相互代名詞が現れる場合 (4) と、前置詞（ここでは対格支配の前置詞 við）を介して相互代名詞が現れる場合 (5) について、分離型と一体型の現れ方を示すものである。一般に、分離型の方が規範的な表現とされるが、話し言葉では一体型

の方が頻繁に使用される。ただし、どちらの形を使うかについては、かなり個人差があることが報告されている (cf. Thráinsson 1979: 326, Everaert 1990)。また後で述べるように、全体として「一体型」と判断すべきと思われる形でも、第一要素の実際の格形の現れ方は、性と格、また話し手によって、かなりのゆれがある。

- (4) a. Þeir börðu hvor annan. [= (1)]
 they.NOM beat.PST.3PL each.NOM other.ACC
 「彼らはお互いに殴り合った。」(前置詞なし、分離型)

- b. Þeir börðu hvorn annan.
 they.NOM beat.PST.3PL each.ACC other.ACC
 「彼らはお互いに殴り合った。」(前置詞なし、一体型)

- (5) a. Þeir ræddu hvor við annan. [= (2)]
 they.NOM talked.PST.3PL each.NOM with other.ACC
 「彼らはお互いに話し合った。」(前置詞あり、分離型)

- b. Þeir ræddu við hvorn annan.
 they.NOM beat.PST.3PL with each.ACC other.ACC
 「彼らはお互いに話し合った。」(前置詞あり、一体型)

ただし、ここでいう「一体型」で前置詞が現れる場合に、次のような、第一要素が主格で現れるものも容認可能とする話者もいると Everaert (1990: 301, fn 5) は報告している。

- (6) a. Þeir töluðu um hvor annan.
 they.NOM talked.PST.3PL about each.NOM other.ACC
 「彼らはお互い同士について話した。」(um は対格支配の前置詞)

- b. Þeir lömdu í hvor annan.
 they.NOM hit.PST.3PL in each.NOM other.ACC
 「彼らはお互いをたたいた。」(í は対格支配の前置詞)

この場合、格形の点で第一要素と第二要素が一致していないが、第一要素と第二要素が前置詞で分断されずに連続して現れることを重視して、ここでは「一体型」の変種とみることにする。後で述べる筆者が調べた新聞記事の用例にも、このようなものがある。

2.3 主語との一致

相互代名詞は、第一要素・第二要素ともに照応先の主語と、性と数の一致を行なう。また、分離型の場合には第一要素は主語と格の一致も行なう。以下、性の一致 (2.3.1)、数

の一致 (2.3.2) について述べた後、格の現れ方について述べる (2.3.3)。

2.3.1 主語との性の一致

相互代名詞は、主語と性の一致をする。次の例文では、a は主語が男性複数、b は女性複数、c は男女のペア（中性複数扱い）であり、それに応じて異なる性の相互代名詞が使用される。ここでは分離型の例を挙げておく。

(7) a. Jón og Sigurður styðja *hver annan*.
John and Sigurd.NOM support.PRES.3PL each.M.NOM other.M.ACC
「ヨウンとシーグルズル（どちらも男性）はお互いに支え合う。」

b. Guðrún og Anna styðja *hver aðra*.
Gudrun and Anna.NOM support.PRES.3PL each.F.NOM other.F.ACC
「グヴェズルーンとアンナ（どちらも女性）はお互いに支え合う。」

c. Jón og Anna styðja *hvort annað*.
John and Anna.NOM support.PRES.3PL each.N.NOM other.N.ACC
「ヨウンとアンナはお互いに支え合う。」

なお、アイスランド語の人称代名詞は単数でも複数でも男性・女性・中性の語形が異なり（複数主格形を例に挙げると、男性þeir, 女性þær, 中性þau）、男女両性の名詞を成員とするグループを代名詞で指示するのには中性複数形が使用され、(7c) のJón og Annaを人称代名詞で置き換えるなら、þauという形（中性複数形）が使われる。

2.3.2 主語との数の一致

数の一致について、主語が二者の場合 (2.3.2.1)、主語が三者以上の場合 (2.3.2.2)、主語が複数のグループの場合 (2.3.2.3)、主語が単数扱いの集合名詞の場合 (2.3.2.4) に分けて述べる。

2.3.2.1 主語が二者の場合

主語が二者の場合、第一要素には*hver*が使用される。これについては上記の例文 (7) を参照されたい。

2.3.2.2 主語が三者以上の場合

主語が三者以上の場合、次の例のように、第一要素には *hver* が使用される。ただし、これは規範的な使い分けであり、後述のように、現在の話し言葉では *hver* と *hver* の区別が失われつつある。ここでも分離型の例のみ挙げておく。

(8) a. Þrír menn styðja hver annan.
 three.M men.NOM support.PRES.3PL each.M.NOM other.M.ACC
 「三人の男性たちはお互いに支え合う。」

b. Þrjár konur styðja hver aðra.
 three.F women.NOM support.PRES.3PL each.F.NOM other.F.ACC
 「三人の女性たちはお互いに支え合う。」

c. Þrjú börn styðja hvert annað.
 three.N children.NOM support.PRES.3PL each.N.NOM other.N.ACC
 「三人の子どもたちはお互いに支え合う。」

2.3.2.3 主語が複数のグループの場合

主語がそれぞれ複数の成員からなる複数のグループの場合、相互代名詞の複数形が使用される。規範的には、関与するグループが二つの場合は *hver* の複数形を、三つ以上の場合は *hver* の複数形を使用するとされる。ここでも分離型の例のみ挙げておく。

(9) a. Rússar og Þjóðverjar réðustu hvorir á aðra.
 Russians and Germans.NOM attacked.PST.3PL each.PL.NOM on other.PL.ACC
 「ロシア人とドイツ人はお互いに攻撃し合った。」 (*hver* の複数形)

b. Rússar, Þjóðverjar og Bretar herjuðu hverjir á
 Russians Germans and Britons.NOM made.war.PST.3PL each.PL.NOM on
 aðra.
 other.PL.ACC
 「ロシア人とドイツ人とイギリス人はお互いに侵攻し合った。」 (*hver* の複数形)

(MBL, 1996/09/03)³

しかし実際の用例では、明らかに二つのグループが関与する場合に *hver* の複数形が使われている例がかなり見られる。(10) と (11) はいずれも関与するグループは二つであるが、(10) では *hver* の複数形が、(11) では *hver* の複数形がそれぞれ第一要素として現れている。なお、例文 (10) の主語は *þingmenn* 「国会議員たち」であるが、属格の修飾成分から二つの政党の議員間の対立を表していることがわかる。

(10) Þingmenn Sjálfstæðisflokks og Samfylkingar vændu
 MPs.NOM Independence.Party.GEN and Alliance.Party.GEN accused.PST.3PL
 hvorir aðra um [...]
 each.PL.NOM other.PL.ACC about

「独立党と同盟（政党名）の国会議員は [...] について、お互いを非難し合った。」

(Fréttablaðið, 2010/03/25) ⁴

- (11) [...] að það sem skipti máli væri að sjúklingar
that it that divides.SBJV.3SG matter is.SBJV.3SG that patients.PL.NOM
og starfsmenn skildu hverjir aðra.
and staff.PL.NOM understand.SBJV.3PL each.PL.NOM other.PL.ACC

「重要なのは患者と職員がお互いを理解することであると [...]」(MBL, 2001/09/22)

次の例は三者以上が関与して *hver* の複数形が使用されている例であるが、文法的な数の一致の原則から若干外れている。つまり、*að* ‘that’ 以下の節の主語は女性名詞 *þjóð* 「国民」の複数形であるが、これは北欧諸国のそれぞれの国民という意味での複数形であり、この名詞は単数形によってある国民全体の集合を表すため（動詞は単数形で一致）、もし文法的に厳密であるなら、相互代名詞には *hver aðra* という女性単数形を使用すべきところであろう。

- (12) Heilbrigðismálaráðherrar Norðurlandanna samþykktu [...]
health.matter.ministers.PL.NOM Nordic.countries.PL.GEN agreed.PST.3PL
að þjóðirnar ynnu saman og aðstoðuðu
that peoples-the.F.PL.NOM work.SBJV.3PL together and support.SBJV.3PL
hverjar aðra ef [...]
each.F.PL.NOM/ACC other.F.PL.ACC if

「北欧諸国の保健相は [...], もし [...] 場合は、国民同士で協力し、お互いに援助し合うことを確認した。」
(MBL, 2001/11/28)

2.3.2.4 主語が集合名詞 *fólk* 「人々」の場合

主語が *fólk* 「人々」という、意味的に複数概念をもつ単数中性名詞（動詞は単数形で一致）の場合、第一要素に *hvað* ‘what’ が現れ、これが規範的な表現とされる。しかし、実際には *hvert* あるいは *hvort* も使用される。ここでも分離型の例のみ挙げておく。

- (13) Fólk-ið styður { *hvað* / *hvert* / *hvort* } annað.
people-the.NOM supports.3SG each.NOM other.ACC

「人々はお互いに助け合っている。」（前置詞なし）

- (14) Fólk-ið er gott { *hvað* / *hvert* / *hvort* } við annað.
people-the.NOM is.3SG good each.NOM with other.ACC

「人々はお互いに対して親切だ。」（前置詞あり）

筆者の調査協力者は、(13) では自身はhvortを使い、hvaðとは言わないとし、(14) では hvert が最も自然であると回答した。また、後で述べる筆者が収集した新聞記事のデータでは、相互代名詞の先行詞としてfólk「人々」が現れている 23 例中、相互代名詞の第一要素がhvaðとなっているものが 8 例、hvertが 12 例、hvortが 3 例であった。

2.3.3 格の現れ方

これまでの例文から明らかなように、分離型では相互代名詞の第一要素は主語の格と一致して主格で現れ、第二要素は述語の動詞や前置詞が要求する格形をとる。ただし、次のように与格主語をとる動詞の文では、相互代名詞の第一要素が与格になる。この場合、第二要素は属格支配の前置詞と結びついて属格で現れている。

- (15) Þeim varð litið hvorum til annars.
 them.DAT became.PST.3SG looked.at.PPT each.DAT to other.GEN
 「彼らは偶然お互いに目が合った。」 (MBL, 1996/09/04) ⁵

Everaert (1990: 284)によると、次の (16), (17) のような、「与格主語」と「主格目的語」をとる動詞（活用は 3 人称単数）の文では相互代名詞の第一要素と第二要素がともに主格で現れ、しかもその目的語の位置で二つの要素が両方とも主格形にならないと容認されないということである。

- (16) a. Þeim leiðist hvor annar.
 them.DAT finds.boring.PRES.3SG each.NOM other.NOM
 「彼らはお互いにお互いが退屈だと思っている。」
 b. *Þeim leiðist hvorum annar.
 them.DAT finds.boring.PRES.3SG each.DAT other.NOM
- (17) a. Þeim finnst hvor annar skýrtinn.
 them.DAT finds.PRES.3SG each.NOM other.NOM strange.SG.NOM
 「彼らはお互いにお互いが変だと思っている。」
 b. *Þeim finnst hvorum annar skýrtinn.
 them.DAT finds.PRES.3SG each.DAT other.NOM strange.SG.NOM

これは第一要素の格が主語と一致することが許されず、また、第二要素が主格で表れるという二点において、極めてまれなケースと思われる。しかし、このような二つの要素がともに主格で現れる文は、実例にはまず現れないと思われ、以下では取り上げない。なお、この節で挙げたような動詞を述語とする文に現れる斜格名詞句の主語性をめぐる議論につ

いては、Thráinsson (1979: Chapter 7), Þráinsson (1999: 234-239) を参照されたい。

2.3.4 口語表現の場合

先行詞との数と格の一致について、アイスランド語の話者自身の側では、どのように言わねばならないかという規範意識と、実際の話し言葉における使用との間にかなりの隔たりがあることが認識されているようである。そこで、アイスランド語の母語話者 2 名の協力を得て、話し言葉での現れ方について調査を行なった。現段階では予備的調査のレベルにとどまるが、その結果をここで述べておく。以下、動詞の目的語として現れる場合 (2.3.4.1) と、前置詞と結びついた場合 (2.3.4.2) に分けて述べる。

2.3.4.1 動詞の目的語の位置

まず、主格主語と斜目的語をとる動詞の目的語の位置での現れ方について述べる。対格支配の動詞として *berja* 「なぐる」、与格支配の動詞として *hjálpa* 「助ける」、属格支配の動詞として *sakna* 「～がいなくて淋しく思う」をサンプルとして使用した。調査協力者 2 名の話し言葉では主語の数に関わらず、*hver* よりも *hvor* を使うことがほとんどとのことで、*hvor* のみを調査した。表 4 の { } 内のどちらの形をよく使うかを回答してもらった。中性形は主格と対格の区別がないため、中性対格形の選択肢は一つである。

表 4 口語表現の変化表 (前置詞なし)

	男性	女性	中性
対格	{ <i>hver</i> / <i>hvorn</i> } <i>annan</i>	{ <i>hver</i> / <i>hvora</i> } <i>aðra</i>	<i>hvort annað</i>
与格	{ <i>+hver</i> / <i>hverum</i> } <i>öðrum</i>	{ <i>+hver</i> / <i>hverri</i> } <i>annarri</i>	{ <i>+hvort</i> / <i>hvoru</i> } <i>öðru</i>
属格	{* <i>hver</i> / <i>hvors</i> } <i>annars</i>	{? <i>hver</i> / <i>hvorrar</i> } <i>annarrar</i>	{* <i>hvort</i> / <i>hvors</i> } <i>annars</i>

(+: よく使う形, ?: あまり使わない形, *: 使わない形)

第一要素の終わりと第二要素の始まりが共に母音の場合、前の母音が脱落する傾向があるため、そうした箇所では第一要素の正確な格形の判断が困難である。そのためもあり、女性対格はどちらの形がよいとも言えないとの回答であった。

格形のみに注目すれば、対格と、特に属格は一体型が優勢、与格は分離型が優勢であるように思われる。しかし、与格も含めて、話し手の意識からすれば二つの要素は一体のものとして認識されているようである。数についても、筆者の調査協力者 2 名の言語では、主語が二者であろうと三者以上であろうと、相互代名詞の第一要素には *hver* を使用することが多いとのことであった。第一要素を *hver* で一般化し、その格形の現れ方にかかわらず、全体を一体のものとして固定しつつあると見るのがよいように思われる。

しかし、Thráinsson (2007: 472-473, fn 6) は、現在の話者には *hver* と *hvor* の区別が明確ではなくなってきており、おそらく *hver* が一般化しつつあると述べている。そして、次のような例を挙げ、多くの話者は (18a) の *hver annan* で主語が二人の場合も三人以上の場合とも言えると判断し、一方、両者の区別をする話者は、主語が二人の場合は (18b) を使うだろうと述べている。

(18) a. *Peir hata hver annan.*

they.NOM hate.PRES.3PL each.NOM other.ACC

「彼らはお互いに憎み合っている。」

b. *Peir hata hvor annan.*

they.NOM hate.PRES.3PL each.NOM other.ACC

「(同上)」

筆者の調査協力者は、あえて分離型で第一要素と第二要素をはっきり分けて表現した場合（「動詞＋第一要素＋前置詞＋第二要素」のタイプ）には、*hvor* と *hver* の区別を意識して使い分けている。それに対して、先に述べた一体型ではむしろ *hvor* の方を一般化しているようであり、このあたりの事情は話者による差が大きいことが予想され、さらなる調査が必要である。

2.3.4.2 前置詞と結びついた位置

次に、前置詞と結びついた位置での現れ方について調査結果を述べる。対格支配の前置詞として *við* 「～に対して」、与格支配の前置詞として *að* 「～に向って」、属格支配の前置詞として *til* 「～へ向って」をサンプルとして使用した。筆者の調査協力者は二人とも、「第一要素＋前置詞＋第二要素」という規範的な語順（分離型）よりも「前置詞＋第一要素＋第二要素」という語順（一体型）の方を話し言葉でよく使うとのことで、後者の方で調査を行なった。また、第一要素には二者と三者以上の区別なく *hvor* を使うことが多いとのことで、*hvor* の形を調査した（表 5）。

表 5 口語表現の変化表（前置詞つき）

	男性	女性
対格	<i>við {*hvor / hvorn} annan</i>	<i>við {hvor / ?hvora} aðra</i>
与格	<i>að {hvor / ?hvorum} öðrum</i>	<i>að {hvor / hvörri} annarri</i>
属格	<i>til {*hvor / hvors} annars</i>	<i>til {?hvor / hvorrar} annarrar</i>

	中性
対格	við hvort annað
与格	að {hvort / *hvoru} öðru
属格	til {*hvort / hvors} annars

(+: よく使う形, ?: あまり使わない形, *: 使わない形)

ここでもやはり、第一要素の終わりと第二要素の始まりが共に母音の場合、前の母音が脱落する傾向があるため、そうした箇所では第一要素の正確な格形の判断が困難である。女性与格については、どちらをよく使うかで、二人の話者の意見が分かれたため、印はつけていない。

第一要素の格形については、動詞の目的語として現れる場合と同様、対格と属格では対格形が優勢、与格では主格形が優勢である。

なお、もし「第一要素＋前置詞＋第二要素」という語順（分離型）を用いるとすれば、その場合には関与者が二者か三者以上で hvor と hver を使い分けるという回答であり、動詞の目的語として二つの要素が連続して現れる場合よりも、第一要素と第二要素が別の語で分けられている場合の方が第一要素の数の認識がはっきりするようである。

2.3.5 一致についてのまとめ

再帰代名詞の分離型と一体型について、それぞれの先行詞（主語）との一致関係を表にまとめると表 6、表 7 のようになる。ただし、上の個々の事例から明らかなように、この二つは截然と分けられるものではなく、それぞれの典型的なパターンを示すにすぎない。斜体になっている箇所が、分離型と一体型とで異なる部分を示す。同じ話し手でも、文体等によって、実際に使用する形がこの二つのパターンの間でゆれているようである。

分離型の表（表 6）は、規範とされる形の一致関係を示すものとなる。ただし、hver と hvor の使い分けに関しては、その区別を保っているかどうか、個人によってかなり異なる。前置詞を介して第一要素と第二要素が分離される場合の方が、その区別が保たれやすいのではないかと予想される。

一体型においては（表 7）、数の範疇に関して、二者（hvor の使用）と三者以上（hver の使用）の区別が失われつつあり、しかもその程度が個人によってかなり差があることが予想される。また、hvor の方を一般化していると思われる話者と、hver の方を一般化していると思われる話者が混在しているようである。表では第一要素は「動詞・前置詞の要求する格」になるとしているが、性・数の組み合わせによって同じ話者でも格形が一定ではない。このあたりの事情を明らかにするには、多くの話者について、話し言葉の大規模な調査をしなければならない。

表 6 分離型の一致（語順：動詞＋第一要素〔＋前置詞〕＋第二要素）

文法範疇	第一要素	第二要素
性	主語と一致	主語と一致
数（個／グループ）	主語と一致	主語と一致（単・複の区別のみ）
数（二者／三者以上）	<i>hvor</i> と <i>hver</i> の使い分け	
格	主語と一致	動詞・前置詞の要求する格

（斜体は一体型と異なる点を示す）

表 7 一体型の一致（語順：動詞〔＋前置詞〕＋第一要素＋第二要素）

文法範疇	第一要素	第二要素
性	主語と一致	主語と一致
数（個／グループ）	主語と一致	主語と一致（単・複の区別のみ）
数（二者／三者以上）	区別されない傾向	
格	動詞・前置詞の要求する格	動詞・前置詞の要求する格

（斜体は分離型と異なる点を示す）

3. 新聞記事のデータより

書き言葉における相互代名詞の使用の実態を調査するために、アイスランドの日報 Morgunblaðið のウェブ版（URL: <http://www.mbl.is/>）に、2001 年 1 月から 2010 年 10 月までの間に掲載されたアイスランドの国内記事を、筆者がワープロソフトで単純にコピー&ペーストして収集したもの（約 2,000 万語）をコーパスとして検索し、分析した結果を述べる。

3.1 分離型と一体型

分離型と一体型がどの程度現れているか、両者がはっきり区別できる格形について（例えば動詞の目的語の位置で中性形は主格と対格が区別できないため除外）、動詞の目的語として現れた場合と、前置詞の目的語として現れた場合の数を調べてみた結果が次の表 8 と表 9 である。複数形は用例数が少ないため、ここでは単数形の結果のみを挙げる。また、前置詞の種類は多く、ここではそれぞれの格形をとるもののうち、最も用例の多い前置詞のみを代表として挙げる（対格支配 við「～に対して」、与格支配 af「～から」、属格支配 til「～へ」）。

表 8 動詞の目的語としての用例数（単数形）

	分離型	用例数	一体型	用例数
男性・対格	hvor annan	22	hvorn annan	14
	hver annan	28	hvern annan	9
女性・対格	hvor aðra	4	hvora aðra	1
	hver aðra	7	hvera aðra	0
男性・与格	hvor öðrum	15	hvorum öðrum	3
	hver öðrum	20	hverjum öðrum	0
女性・与格	hvor annarri	4	hvorri annarri	0
	hver annarri	1	hverri annarri	0
中性・与格	hvort öðru	13	hvoru öðru	1
	hvert öðru	19	hverju öðru	1
男性・属格	hvor annars	0	hvors annars	0
	hver annars	0	hvers annars	0
女性・属格	hvor annarrar	0	hvorra annarrar	0
	hver annarrar	0	hverrar annarrar	0
中性・属格	hvort annars	0	hvors annars	0
	hvert annars	0	hvers annars	1
合計		133		30
第一要素の 内訳	hvor	58	hvor	19
	hver	75	hver	11

表 9 前置詞の目的語としての用例数（単数形）

	分離型	用例数	一体型	用例数
男性・対格	hvor við annan	6	við hvorn annan	1
			við hvor annan	2
	hver við annan	18	við hvern annan	1
女性・対格	hvor við aðra	0	við hvora aðra	0
			við hvor aðra	1
	hver við aðra	1	við hvera aðra	0
中性・対格	hvort við annað	5	við hvort annað	2
	hvert við annað	16	við hvert annað	5

男性・与格	hvor af öðrum	7	af hvorum öðrum	0
			af hvor öðrum	1
	hver af öðrum	17	af hverjum öðrum	0
女性・与格	hvor af annarri	2	af hvorri annarri	0
	hver af annarri	4	af hverri annarri	0
中性・与格	hvort af öðru	2	af hvoru öðru	0
	hvert af öðru	10	af hverju öðru	0
男性・属格	hvor til annars	1	til hvors annars	1
	hver til annars	4	til hvers annars	2
	hvers til annars	2		
女性・属格	hvor til annarrar	0	til hvorra annarrar	0
	hver til annarrar	0	til hverrar annarrar	0
中性・属格	hvort til annars	1	til hvors annars	1
	hvert til annars	3	til hvers annars	1
合計		99		18
第一要素の 内訳	hvor	24	hvor	9
	hver	75	hver	9

なお、við hvor annanのように、前置詞の後に相互代名詞が現れながらも第一要素が主格形になっている例がいくつか見られたが、ここでは「一体型」の変種とみなした(例文(6)の前後を参照)。

この数字を見ると、新聞記事では分離型が圧倒的に多く現れていることがすぐにわかる。ところが、第一要素の内訳を見ると、分離型ではhverの出現度数がhvorのそれよりかなり高いのに対し、一体型の方ではhvorの割合が高くなっている(前置詞の目的語の場合は同数)ことがわかり、分離型と一体型とでは、それぞれhvorとhverの現れ方の傾向が異なっていることが見て取れる。先行詞の数との一致を詳細に検討しなければ正確なことは言えないが、2.3.4から2.3.5にかけて考察したような数の範疇に関わる事柄を何らかの形で反映しているものと思われる。個人の言語使用にはかなりの差があるとしても、全体としての数字にこうした偏りが見られるのは興味深い。

3.2 動詞の目的語として

対格支配の動詞(3.2.1)、与格支配の動詞(3.3.2)、属格支配の動詞(3.3.3)に分けて述べる。

3.2.1 対格支配の動詞

対格支配の動詞が現れる例文はこれまで多く挙げてきたので、ここでは具体例を繰り返して示すことはしない。上記の表 8 に示したように、「一体型」と判断できる相互代名詞は、対格目的語の位置で比較的多く現れており、両者の動詞を比べることで、動詞の意味による傾向を検討してみる。以下にその動詞の内訳を示す。

(19) 「分離型」対格の相互代名詞を目的語としている動詞

nálgast「近づく」(×7), aðstoða「支援する」(×4), styðja「支持する」(×4), yfirbjóða「(入札などで) 相手より高値を提示する」(×4), virða「尊重する」(×4), bæta upp「補償する」(×2), bera sökum「非難する」(×2), berja「殴る」(×2), fjarlægjast「遠ざかる」(×2), leysa af「取って代わる」(×2), saka「非難する」(×2), sjá「見る」(×2), skilja「理解する」(×2), þekkja「知っている」(×2), umgangast「交際する」(×2), upplýsa「知らせる」(×2), beita「～を働く」, bíta「噛みつく」, bursta「払い落とす」, elta「追いかける」, finna「会合する」, gagnrýna「批判する」, hafa「持つ」, hvetja「励ます」, leita uppi「探し出す」, mana「けしかける」, spegla「反映する」, spyrja「問う」, útiloka「排除する」, undirbjóða「相手より低値を提示する」, yfirheyra「質問する」

(20) 「一体型」対格の相互代名詞を目的語としている動詞

berja「殴る」(×4), skilja「理解する」(×2), nálgast「近づく」(×2), aðstoða「支援する」, bæta「補償する」, bakka「支持する」, draga「引き動かす」, hata「憎む」, hlera「盗聴する」, kýla「殴る」, kyssa「キスする」, mana「けしかける」, rífa「激しく非難する」, saka「告訴する」, skera「切る」, styðja「支える」, þjálfar「鍛える、コーチする」, útiloka「排除する」, undirbjóða「(入札などで) 相手より低値を提示する」

(19) と (20) で重複する動詞も見られるが、大まかな傾向として、一体型の相互代名詞を目的語とする動詞には「殴る」など相手に物理的な影響を与えるような動詞や、「憎む」など相手に対して激しい感情を持つことを表す動詞の割合が多いことが指摘できよう。いわゆる「他動性」の程度の大きい動詞が一体型の相互代名詞を目的語とする傾向にあるということかもしれない。新聞記事の書き手は規範的な分離型を使用することが多いと予測されるが、それでも事例に現れた一体型の例に、こうした傾向が見られるのは興味深い。

3.2.2 与格支配の動詞

与格支配の動詞には次のような例がある。

- (21) Við vorum að kynnast hver öðrum og [...]
 we.NOM were.PST.1PL to get.to.know each.NOM other.DAT and
 「私たちは互いに懇意になり [...]」 (MBL, 2003/01/20)

与格支配の動詞としては他に klappa 「(軽く) たたく」, mæta 「会う」, svara 「答える」, stríða 「からかう」, treysta 「信頼する」, þakka 「感謝する」, hrósa 「賞賛する」, lyfta 「持ち上げる」などが現れている。

また、与格の相互代名詞は、受け手や受益者を表す間接目的語の位置によく現れる。

- (22) Við sendum hvert öðru fréttir af [...]
 we.NOM send.PRES.1PL each.NOM other.DAT news.ACC of
 「私たちは [...] についての知らせを互いに送り合う。」 (MBL, 2007/11/21)

このような与格をとる動詞の例としては、gefa 「与える」, senda 「送る」, bjóða 「提供する」, lána 「貸す」, veita 「付与する」, sýna 「示す」, selja 「売る」, segja 「言う」, afhenda 「手渡す」, gera 「する」などがある。

3.2.3 属格支配の動詞

属格支配の動詞の例は非常に少ないが、次のような例がある。

- (23) [...] við erum öll systkin í Kristi og eigum
 we.NOM are.PRES.1PL all siblings in Christ.DAT and have.PRES.1PL
 því að gæta hvers annars og [...]
 therefore to take.care.of each.GEN other.GEN and
 「私たちは皆キリストにおいて兄弟姉妹であり、それゆえお互いを気遣わねばならず [...]」 (MBL, 2006/10/26)

3.3 前置詞の目的語として

対格支配の前置詞 (3.3.1)、与格支配の前置詞 (3.3.2)、属格支配の前置詞 (3.3.3) に分けて述べる。

3.3.1 対格支配の前置詞

対格支配の前置詞と結びついた相互代名詞の用例を挙げる。

- (24) [...] geta þingmenn rætt hver við annan
 are.able.to.PRES.3PL MPs.NOM discuss each.NOM with other.ACC

um þau mál [...]

about those matters

「[...] 国会議員は [...] お互いにそれらの件について議論することができ [...]

(MBL, 2008/10/08)

このほか動詞との結びつきの強い対格支配の前置詞の例を挙げると、hlusta á「～を聞く (á: ～の上を)」, rekast í「～にぶつかる (í: ～の中へ)」, vita um「～について知る (um: ～について)」などがある。

3.3.2 与格支配の前置詞

与格支配の前置詞と結びついた相互代名詞の用例を挙げる。

(25) [...] þar sem menn læra hver af öðrum.

where men.NOM learn each.NOM from other.DAT

「[...] そこで人々はお互いから学び合う。」

(MBL, 2003/04/22)

このほか動詞との結びつきの強い与格支配の前置詞の例を挙げると、fylgjast með「注目する、ついていく (með: ～とともに)」, vinna gegn「～に反する働きをする (gegn: ～に反して)」などがある。

3.3.3 属格支配の前置詞

属格支配の前置詞が相互代名詞とともに使用された例は、今回使用したコーパスでは til「～へ向って」のみである。

(26) [...] að þeir læri að taka tillit hver

that they.NOM learn.SBJV.3PL to take consideration.ACC each.NOM

til annars og [...]

to other.GEN and

「[...] 彼らはお互いに対して配慮することを学んで [...]

(MBL, 2008/05/27)

3.4 属格をめぐる

属格の相互代名詞について、ここまでは動詞または前置詞の目的語として現れる例を挙げたが、属格が最も頻繁に使用されるのは、他の名詞句を修飾する成分としてである。ここではこの用法について触れておく。この場合、第一要素・第二要素とも属格で現れ、第一要素の格は主語と一致しない。

- (27) [...] mikilvægt er að við getum áfram skilið
 important is that we.NOM are.able.to.1PL onward understand
 tungumál *hvers annars*.
 language.ACC each.GEN other.GEN
 「[...] 重要なのは、我々が今後もお互いの言語が理解できるということである。」
 (MBL, 2008/09/23)

他の名詞句を修飾する成分としては、論理的には上の例のように第一要素・第二要素ともに属格になるはずであるが、目的語の位置での規範的な形に牽引されるためか、第一要素が主格で現れている例もかなりある。

- (28) [...] hve duglegir íbúar Norðurlandanna væru
 how diligent inhabitants.PL.NOM Nordic.countries.GEN are.SBJV.3PL
 að skilja mál *hver annars* [...]
 to understand language.ACC each.NOM other.GEN
 「北欧諸国の住民がお互いの言語を理解しようとするのにいかに熱心か [...]」
 (MBL, 2006/03/14)

また、第一要素が属格で現れ、第二要素が前置詞の要求する格で現れている例もある。この場合、第一要素が先行詞の格と一致し、第二要素が独自に前置詞と結びついた分離型と考えることができるであろう。第一要素が主語の修飾成分の格と一致していることが注目される。

- (29) [...] að skyldleiki Íslendinga *hvers við annan*
 that kinship.NOM Icelanders.PL.GEN each.SG.GEN with other.ACC
 útskýri *hvers vegna hann er eins algengur hér og raun*
 explains.SBJV.3SG why it is as common here as truth
 ber vitni.
 bears.3SG witness.ACC
 「アイスランド人のお互い同士の近縁関係が、どうしてその（病気）がここでは通常よりも多いのかということを説明すると [...]」
 (MBL, 2001/03/17)

3.5 その他の用法

本稿では相互代名詞が動詞あるいは前置詞の目的語として現れるものを中心に挙げたが、その他の用法として、相互代名詞が形容詞や副詞の補足語として現れる例 (3.5.1)、相互代名詞と同じ形式が継起的な事態を表す例 (3.5.2)、相互代名詞が形容詞的に使用さ

れている例 (3.5.3) に簡単に触れておく。

3.5.1 形容詞や副詞の補足語として

相互代名詞は、形容詞や副詞の補足語として現れることもある。(30) は形容詞、(31) は副詞の例で、どちらも与格の補足語と結びつくものである。

- (30) [...] íbúðarhús eru mjög ólík hverju öðru.
houses.PL.NOM are.PRES.3PL very unlike each.dat other.dat
「[...] (デンマークとアイスランドの) 家屋はお互いにずいぶん違っている。」
(MBL, 2001/09/28)

- (31) Urðu brunar-nir þrír nálægt hver öðrum og
became.PST.3PL fires-the.PL.NOM three close.to each.NOM other.DAT and
með skömmu millibili.
with short interval.DAT
「これら 3 つの (コンテナの) 火災は互いに距離が近く、短い間隔で生じた。」
(MBL, 2006/0930)

3.5.2 継起的な事態

本稿では *hver/hvor* と *annar* という不定代名詞の組み合わせを「相互代名詞」と呼んでいるが、この組み合わせが継起的な事態の描写に使用されることもある⁶。この場合、第一要素としては *hver* のみが出現し、*hver* は使用されない。また、本稿でいう「分離型」でしか現れない。「次々に」という継起的な事態の表現には *hver eftir öðrum* ‘each.NOM after other.DAT’ という前置詞による表現や、*hver á fætur öðrum* ‘each.NOM on feet.ACC other.DAT’ (直訳: それぞれが他の者の足の上に) という成句表現が頻繁に使われる。(32) は主語を先行詞としている例である。

- (32) Sjálfstæðismenn fóru hver á fætur
Independence.Party.men.PL.NOM went.PST.3PL each.NOM on feet.ACC
öðrum í ræðustól [...] *öðrum*
other.DAT in rostrum.ACC
「独立党の議員は次々と登壇し [...]」
(MBL, 2010/06/10)

次の例では、前置詞の目的語を先行詞として継起的な事態を表しており、これは相互関係の表現では見られないパターンである。

- (33) [...] próftaki-nn er látinn glíma við óþreytta
 tryout.taker-the.SG.NOM is.PRES.3SG let.PPT wrestle.INF with not.tired
 menn, hvern á fætur öðrum og [...]
 men.PL.ACC each.SG.ACC on feet.ACC other.SG.DAT and
 「[...] (総合格闘技の) テスト生は、疲れていない (まだ対戦していない) 男たち
 と次々に対戦させられて [...]」 (MBL, 2007/06/06)

3.5.3 形容詞的用法

代名詞が形容詞的に使用される例もある。(34) は相互関係を表す例で、(35) は継起的な事態を表す例である。どちらも、第一要素は主語の位置にある名詞句を修飾する成分として現れている。

- (34) Hver dagur er öðrum ólíkur þótt viss
 each.NOM day.sg.NOM is.PRES.3SG other.DAT unequal.NOM although certain
 störf verði alltaf að inna af hendi.
 work.PL.NOM must.SBJV.3PL always to be.get.done.INF from hand.DAT
 「決まった種類の作業は常に片付けねばならないが、毎日がそれぞれ違っている。」
 (MBL, 2006/02/13)

- (35) [...] fer hver farfugl-inn af öðrum að
 go.PRES.3SG each.NOM migratory.bird-the.SG.NOM from other.DAT to
 koma til lands-ins, [...]
 come.INF to land-the.SG.GEN
 「[...] 渡り鳥がつぎつぎとアイスランドに来はじめており [...]」
 (MBL, 2006/02/13)

4. おわりに

以上、具体例の場合分けをしながら、相互代名詞の現れ方の概要を示した。本稿で論じた主要な点をまとめると、次のようになる。

- a. 相互代名詞は二つの代名詞要素から成り、それぞれの要素の独立性が高い「分離型」と、全体で一つのまとまりを成す「一体型」の二つのタイプに基本的に分けられる。
- b. 「分離型」と「一体型」で異なるのは、先行詞と第一要素の一致に関わる文法範疇であり、第一要素の数（二者／三者以上の区別をするかどうか）と格（主語と一致するか目的語としての格をとるか）が問題となる。

- c. 「分離型」は規範的・書き言葉的であるのに対し、「一体型」は口語的であるという文体的な違いがあり、新聞記事の用例では「分離型」の方が圧倒的に多い。第一要素の現れ方を見ると、「分離型」では *hver* の出現頻度が高く、「一体型」では *hver* の出現頻度が上がっており、両者における数の範疇に関する認識の差を反映していることが予想される。
- d. 新聞記事のデータで対格目的語の位置に相互代名詞をとっている動詞を検討すると、「分離型」よりも「一体型」をとる動詞の方が、いわゆる他動性の傾向が高い傾向にあると思われる。
- e. 相互代名詞は形容詞や副詞の補足語としての位置にも現れる。また、同じ代名詞要素が継起的事態を表す表現にも使用されるが、後者の場合は「分離型」でしか現われず、また、目的語を先行詞とする場合もあるという点で、相互代名詞の現れ方と異なる。

口語表現における実態については、まだ不明な点が非常に多く、今後さらなる調査が必要である。また、新聞記事のデータもいまだ分析の途上であり、本稿で論じた点についても、今後さらに考察を深める必要がある。

注

- * 本稿は、日本学術振興会平成 22 年度科学研究費補助金(基盤研究 (C)、課題番号 22520428、研究課題「アイスランド語における相互表現の研究」) による研究成果の一部である。
- ¹ ゲルマン系の言語。話者数は約 30 万人。名詞類には形態論的な格として、主格・対格・与格・属格の区別がある。名詞には接尾辞定冠詞がついた形があり、これを本稿では英語のグロスで ‘-the’ と表示する。不定冠詞はない。単純時制は現在と過去。なお、本稿に使用した話し言葉に関するデータは、Már Másson さんと Sigríður Maack さんに母語話者として協力していただいた調査で得られたものである。お二人には心より感謝申し上げます。
- ² なお、これらは生成文法の立場からの理論的な研究で、該当箇所では再帰代名詞などと共に、主に照応をめぐる問題の中で相互代名詞が扱われているが、本稿ではこうした面の問題には触れず、これらの研究でデータとして挙げられている例文を参照するにとどめる。
- ³ MBLはアイスランドの日刊紙Morgunblaðiðの略号。例文はどちらもHvað skal segja?「どのように言えばよいでしょう?」というコラムで取り上げられたもので、規範的な表現を示している。

- 4 Fréttablaðiðはアイスランドの日刊のフリーペーパー。オンラインニュースのウェブサイト Vísir (<http://www.visir.is/>) に掲載された記事による。
- 5 Hvað skal segja?「どのように言えばよいでしょう?」というコラムで取り上げられたもの。
- 6 Lichtenberk (1985) は多くの言語で、相互関係を表す形式が、他の関連した状況の描写にも使用されるとし、その中に継起的な事態 (“chaining situation”) も含まれている。

略号

1	1 人称 (1st person)	PL	複数 (plural)
3	3 人称 (3rd person)	PPT	過去分詞 (past participle)
ACC	対格 (accusative)	PRES	現在 (present)
DAT	与格 (dative)	PST	過去 (past)
F	女性 (feminine)	REFL	再帰代名詞 (reflexive pronoun)
GEN	属格 (genitive)	SG	単数 (singular)
INF	不定詞 (infinitive)	SBJV	接続法 (subjunctive)
M	男性 (masculine)	+	選択肢の中で好まれる語句
N	中性 (neuter)	*	不適格と判断される文や語句
NOM	主格 (nominative)	?	認容可能性が低い文や語句

参考文献

- Everaert, Martin (1990) Nominative anaphors in Icelandic: morphology or syntax? In: Werner Abraham et al. (eds.), *Issues in Germanic syntax*, Mouton de Gruyter, 277-305.
- Lichtenberk Frantisek (1985) *Multiple uses of reciprocal constructions*. Australian Journal of Linguistics 5: 19-41.
- Thráinsson, Höskuldur (1979) *On complementation in Icelandic*. New York & London: Garland.
- Þráinsson, Höskuldur (1999) *Íslensk setningafræði [6. útgáfa]*. Reykjavík: Málvísindastofnun Háskóla Íslands.
- Thráinsson, Höskuldur (2007) *The syntax of Icelandic*. Cambridge: Cambridge University Press.